

「とっとり評判記」

第14話

なんでも

橋浦泰雄と尾崎翠 故郷でのひとコマ



「因伯時報（昭和5年5月26日号）」より

やまびこ博士：今日は昭和5年にタイムスリップしてみました。

こだまちゃん：聴衆や新聞記者がたくさん来てますね。カメラを向けられている人たちは誰かしら？

やまびこ博士：左から順に、橋浦泰雄（明治21～昭和54）、尾崎翠（明治29～昭和54）、秋田雨雀（明治16～昭和37）。地元の文学団体が主催し、鳥取市で開催された講座の講師をつとめた人たちだよ。

こだまちゃん：この頃の有名人なんですね。

やまびこ博士：そうなんだ。3人とも、先進的な作家や思想家として、全国的に知られていた。

こだまちゃん：へえ。でも、なんだか記者も観客も、妙に親しそう。

やまびこ博士：実は、青森県出身の秋田雨雀を除く2人は、地元出身者なんだ（生誕地は現在の岩美町）。年齢は橋浦泰雄の方が尾崎翠より8歳上だけれど、いわば同郷の仲間として、東京でも交流があった。

こだまちゃん：ふうん。あまり名前を聞いたことがないけど、どんなことをした人なの？

やまびこ博士：秋田雨雀は主に演劇の脚本作家として知られる人物で、生涯ヒューマニズムを貫いた。国際共通語として考案された「エスペラント」普及にも取り組んでいる。生誕地である青森県には記念館も創られている。

こだまちゃん：優しい表情の方ですねえ。

やまびこ博士：橋浦泰雄は、画家・作家など多くの顔をもつ人物で、鳥取時代には地元で文芸雑誌を編

集していた。上京後は有島武郎と親しく交わった。この写真の頃は、芸術を通じた独自の社会運動や、民俗学者・柳田国男を助けて、学会の組織化や画像資料の研究に取り組んでいた。戦後も多くの業績がある人だから、こだまちゃんのおじいさん位の年の人なら、名前くらいは知っているんじゃないかな。

こだまちゃん：鳥取で民俗学が盛んなのは、この人の影響もあるのかなあ。

やまびこ博士：そして、尾崎翠。最近、作品集や全集が出版されたり、映画が作られたりしている女性作家だよ。代表作は『第七官界彷徨』など。林芙美子らにも影響を与えた斬新な作風は、やや難解だけれど現代的な魅力にあふれている。毎年、地元の有志による「尾崎翠フォーラム」も開催されるようになった。

こだまちゃん：かっこいいお姉さんですね！とってもおしゃれ。

やまびこ博士：この時代、東京で活躍している人たちと、地元で頑張っているひとたちの間の距離は、現在より近かったように思える。橋浦泰雄や尾崎翠は、自分自身が中央で活躍しただけでなく、その成果を直接故郷にもちかえる、いわば文化大使のような存在だったんだ。この2人以外にも、そういった役割を果たした人たちがたくさんいたから、当時の鳥取は、「山陰でもっとも進歩的な地域」といわれていたんだ。

こだまちゃん：そのことが伝わってくるひとコマですねえ。

【佐々木孝文（鳥取市歴史博物館学芸員）】